

# 末黒野

すぐろの

2月号 (通巻834号)



# ゆりかもめ

小川 玉泉

(名譽主宰)

不揃ひの丈の櫓の枯るる小田  
茶柱や障子を鳴らす朝の風  
欄干の影くつきりと十三夜  
小春日や駅を通過の貨車数ふ  
姥の撒くパンわれ先にゆりかもめ  
ゆりかもめ一糸乱れず中州発つ

姥の撒くパンわれ先にゆりかもめ

毎年北風の季節になると待たれるものに、ゆりかもめがある。江の島へ注ぐ境川・通称片瀬川を賑わしてくれる鳥である。白い体に脚と嘴が紅く美しい。多い時には五十羽ほどの群が中州に憩うのに出会う。近所の姥が、餌のパンを撒くと、争って空中で奪い合う。その素早さには驚嘆させられる。今年は十一月三日に先陣を見かけた。川の水が綺麗になったのが救いである。

# 安房の秋

照り翳り千の魯田穂を上げて  
おのがじし色もつ魯千枚田  
千枚の柵田や千の風の色  
秋のこゑ溜めて頼朝かくれ穴

松本三千夫

船頭は島見ず秋の海を漕ぐ  
二挺艦へ磯の秋風荒々し  
秋じめりひそめ島主の奥座敷  
句碑多き仁右衛門島に秋惜しむ  
秋うらら隧道多き安房の道  
日蓮の足跡慕ふ木の実踏み  
楼門の火伏せ般若や冬隣  
紅葉づるや滝離れても滝の音

# 枯芭蕉

黒滝志麻子

(副主宰)

大仏の丈余の影の小春かな  
そこだけが雨音荒き枯芭蕉  
好日や味をうすめに煮大根  
しかとある牡丹の冬芽時頼忌  
義理ひとつ果しに出づる片時雨  
師に合うて冬の夜風のやはらかし  
厄除けの箸買ふ日ぐれ酉の市  
蕪漬ひとふり利かす能登の塩  
冬の夜や三更告ぐるオルゴール  
雪雲をどつかと据ゑて主峰なる  
冬ぬくし朝日差し込む連子窓  
噴煙や冬青草の牧場より

# 甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）

## 吟行日和

田中臥石

青空へ蜻蛉の翅ひかり透く  
空落ちて蟋蟀の夜となりにけり  
猿出づる安房や棚田の秋暑し  
吹き起る秋風千の安房棚田  
膝が笑ふ寺燈半ばや烏瓜  
写真撮る海風寒き誕生寺  
妻留守の机に匂ふラ・フランス  
母の忌や一会の人と時雨傘  
紅葉散る上総久留里の天守閣  
波郷忌の日なり久留里の城の坂

## 菊日和

松田泰子

行く秋の米研ぐ間にも暮れにけり  
み仏に触るるまで寄り菊日和  
掃除機の掃除してをり秋桜  
千切れたるまま急ぐなり野分雲  
秋蝶の睦み合へるも風のまま  
朝寒の振り向かぬ子に手を振りて  
眠りては目覚めては秋深めけり  
菊日和昨日は泣きし喪服干す  
白桃を手で剥いてをり押し黙る  
長髪の若者なりき松手入れ



# 秋惜しむ

森 清 堯

軽やかなる疲れを連れて夕花野  
一枝のみ紅葉を急ぐ大櫛  
酢橘採る母に躑ぎゆき言も無し  
ハンチング少し遅れて秋日傘  
大樟の根方の洞や残る虫  
百選の棚田の穠濃く淡く  
廃校は村起しの場檀の実  
軒低き島主の館石落の花  
師に倣ふ水切り三度秋惜しむ  
未広の白の幾筋秋の滝

# 櫓に穂

森 清 信子

雲の影走る棚田や櫓に穂  
不揃ひの櫓の丈や千枚田  
秋深し棚田の水の赤錆びて  
廃校にランチビュッフェや栗おこは  
秋うらら膝繰り合はす渡し舟  
秋寂びぬ水夫かこの半纏色褪せて  
濤音の轟きやまずとべらの実  
風と待つ歸りの渡舟秋惜しむ  
唇の乾く潮風新松子  
潮の香の旨き鴨川秋気満つ

# 乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）



秋深む 堺昌子

魯田の風の高さや千枚田  
溪川の音や上総の秋深む  
猿出づる峠や燦と木守柿  
乾坤のすがすがしさや山粧ふ  
海をむく翁の句碑や海桐の実  
神杉の天突く勢鳥渡る  
植田かと紛ふ魯の千枚田

## 旅日記

齊藤マキ子

新涼 西川みほ

ブランデー落とす紅茶や居待月  
草の実や測量技師の登山靴  
岩屋神祀る小島や鳥渡る  
芙蓉の実鳴らす海風真砂女の碑  
冬もみぢ小さき句帳の旅日記  
峡谷へずり落ちさうや紅葉宿  
平家村の分厚き闇や冬銀河

新涼や尾を跳ねあげて御饌の鯉  
新涼の水に晒して削ぎ牛蒡  
霧速し嶺つぎつぎと消しゆける  
人のふり見て深まれる秋思かな  
色鳥や五線譜著き白秋碑  
落武者の塚多き里柿熟るる  
とろり凧ぐ湖に影さす夕紅葉



青炎集

松本三千夫選



丹沢の夕べ幽き鹿の声

横浜

辻井ミナミ

日表の柿あかあかと里日和  
天辺の野菊の風や千枚田  
役終へし案山子膝折る棚田かな  
櫓生ふ棚田の畦も緑かな  
霧晴るる低き山脈安房の国

母さんと呼びたきやうや秋夕焼

横浜

有賀鈴乃

初もみぢ棚田に昨夜の雨光り  
三寸余伸びたる櫓風呼べる  
古民家や放し飼ひなる鴨の列  
千年の杉の根方や石路の花  
石垣も磴も苔むし石路の花

良の柁の花香をみたす

横浜

三橋玲子

野分過ぐ杉の香の立つ輪王寺  
新走り下戸も上戸も祝ひ膳  
朝寒やケトルの笛の音高し  
明け暮れに直と寄りくる冬隣  
枯蓮の豎笛めきて風の声

七五三袴に靴の龍馬ぶり

横須賀

牧はるか

便箋よりスマホ頼りの文化の日  
外出着日々きめかぬる冬はじめ  
ペーコンのかりかり焼きや憂国忌  
与力の墓遊女とならぶ小春かな  
焦げつきし鍋に水張る一の酉

横 浜 遠 藤 清 子

**読めぬ句碑なぞれる指に秋の風**

弧を描くダムの放水天高し  
秋潮や礁に高き波しぶき  
秋落暉すとんと富士の左肩  
徒雲の時をり隠す後の月  
ゆるり飛ぶ小さき秋蝶草に消ゆ

横 浜 都 留 百 太 郎

**御明かしの天照らすかに柚子うるる**

葉隠れに棘はべりをり青酢橘  
いちじくに登り食べ頃さぐりける  
供出の新米馬車で納めけり  
枝打ちの杣の軽やかいぶし銀  
笹鳴きのほら聞こえたと告げらるる

横 浜 正 谷 民 夫

横 浜 新 谷 フ ク エ

**しろがねの風のとどまる芒かな**

髪を梳く指の残り香藤袴  
鈴虫の家ぬばたまの闇に入る  
かりがねや低めに締めし無地の帯  
十六夜の月や竹田の子守唄  
鍋焼や句仲間といふ熱き仲

横 浜 榎 本 佐 智 子

**散紅葉大きく開く仁王の手**

野仏の半紙に置かる茸飯  
泥つきの芋の直売郷土館  
鰐口の冷ゆる綱ふる朝の寺  
膝つきて撫づる仏足散紅葉  
裏庭の日のやはらかや石路の花

横 浜 今 村 千 年

わだかまりとけていくがに水の秋  
月白や朱橋の先は閻魔堂  
谷戸ごとに吹く風違ふ暮秋かな

貼り終へし障子明りに小半時  
滑川の朱橋明るき時雨かな

**天井画の竜の呼びたる時雨かな**

行く秋や渡しの舟の櫓の軋み  
訪ね来し安房の棚田や櫓の穂  
**この町は八重の潮風鱒干す**  
団栗やもう直ぐ吹けるハーモニカ  
早雲の城をそびらに菊花展  
詣でたる谷中の墓地は菊のなか

# 耕 土 集

## 黒滝志麻子選



横浜 邑田のり子

破芭蕉揺るる鐘撞堂の鐘  
黄金の秋てふプラハ石畳

柏 淵田 則子

子の幸を願ひつつ吾月見酒  
―石路の黄や夕暮どきの道標

シユトラウスの調べやドナウ水澄みて

ドア鍵を靴に探す暮早し

白樺の幹の白さや今朝の冬

冬ざれの墓地より帰る吾ひとり  
焼芋を割つて湯気ごと供へをり

竹箒小箒総出落葉掻き

開発の歩き納めや刈田道

三郷 中谷 未知

中天に浮かぶ高層霧立ちぬ

街頭に立ちたることも赤い羽根  
秋うらら幼の僕と言ひ初むる

寒暖の気紛れ忙し冬隣り

喜多院の美男の羅漢探す秋

由布岳の裾模様染む柿紅葉

運び込む今が見頃や菊花展

乱れ咲く茶花眩し由布の里

枯枝の浮き玉揺るる港町

ふたつみつ小さき病夕時雨

大網白里 上家 正勝

小春日の鴉たはむる空に雲

文化の日母愛用の鯨尺

時雨でも原発ノ一のデモ行進

津和野路の堀の真鯉や水の秋

山稜の朴落葉ふみ久留里城

身罷りし母や雲間を夜半の月

待ちぼけて熱爛ぐいや赤提灯

喪歸りの路地の灯りや神無月  
水郷の櫓を漕ぐ音や秋惜しむ

横浜 峰 幸子

目黒 五十嵐貴志子